

医用情報工学科学生海外医療研修報告
「韓国ソウル市漢陽大学校」訪問研修

医用工学部医用情報工学科教授 長谷川正志

医用工学部医用情報工学科では昨年度より「韓国医療研修」を「医療情報セミナー I」という科目のフィールドワークの一環として取り組んでいます。

本年度も9月3日～9月5日の2泊3日で韓国ソウル市にある漢陽(ハニャン)大学校を訪問して医療研修を実施してきました。2年生を対象に希望者を募り、本年度も12名が参加を希望しました。8月に3回事前オリエンテーションを実施し、学生たちは韓国の歴史・文化・生活習慣及び日本との関わりから、医療制度や病院情報システム等の講義を受けた上での研修実施となりました。

研修先の漢陽大学校は韓国の名門総合大学の1つであり、医学部附属病院と附属国際病院を訪問してきました。

医学部附属病院は21階建ての大病院で、事務長から病院の概要説明と院内の情報ネットワークについての説明を受けました。放射線科の丁(チョン)チーム長から最新のCT, MRI, PET等の画像機器や放射線治療装置について詳しい説明を受け、学生たちも熱心にメモを取り、質問もしていました。

病院の最上階にはVIP病室があり、高額な差額ベッド料(1日15万円程)にもかかわらず、その時は満床で部屋の中を見ることはできませんでしたが、セキュリティ等についての説明を受けました。

附属国際病院は、海外からの患者の健康診断と精密検査を専門に実施する病院で、ロシア、モンゴル、ウズベキスタンからの患者が8割以上とのことでした。また、そのために医療通訳者が7名常勤で配置されているとのことでした。

日本も観光だけではなく医療についても今後国際化が求められます。当然ですがそれを受け入れる医療機関にも受け入れるための様々な課題が山積しています。学生たちにとってこのようなシステムの病院を見学できたことは非常に良かったと思います。

また、今回の研修では大学構内の見学もさせていただき、キャンパスの中に地下鉄の駅があるなど、その広さに学生たちは驚いていました。

2泊3日の短い研修でしたが、海外が初めてという学生も多く、学びと同時に、大学生活の大きな思い出の一つになった様子でした。尚、参加学生の報告がSUMSニュースに掲載されますので併せてご覧ください。



最初に医学部附属病院事務長から病院概要の説明を受けました。



放射線治療装置室での説明の様子



漢陽大学本部建物の前で記念撮影



附属国際病院前で記念撮影